資料

被災地ボランティア活動が看護学生の自己イメージと社会人基礎力，自己効力感に与える影響と学生の思い

曽根志穂[1§]，武山雅志[1]，金谷雅代[1]，石垣和子[1]

概　要

本研究の目的は，被災地ボランティア活動が学生に与える影響と学生の思いを明らかにすることである．ボランティア活動に参加した学生を対象にイメージ評定，社会人基礎力，自己効力感に関する質問紙調査とボランティア活動で感じたこと，考えたことについてインタビュー調査を実施した．活動前後を比較して「わたし」イメージは参加継続群の方に変化があり，学生の目が他人に向いていることを示し，「人間」イメージは初回参加群の方に変化があり，自分を振り返ることができていると考えられた．社会人基礎力では，初回参加群がいずれの領域も伸びており，活動経験の効果が表れていた．自己効力感は活動後に参加継続群で高かったが，初回参加群では向上を認めなかった．インタビューの結果，学生の活動参加回数や学年によって，自己の振り返りによる自己受容や自信，対象への理解や関心の深まり，自分が関わることによる他者に対する不安や心配が生じる違いがあった．これらより，学生がボランティア活動に継続して参加することより，看護学を活かせる自分たちの利点や意義を見出し，やり遂げたという経験を積み重ね，他者に自分が受け入れられるかだけでなく，自分自身を振り返り自己受容へと展開し，自己イメージの肯定的影響はより大きくなり，社会人基礎力と自己効力感を向上させる効果があることが考えられた．教員は，学生の思いを聴き，学生が主体となって活動を継続できるようにサポートすることが望まれる．

キーワード　被災地ボランティア活動，看護学生，自己イメージ，社会人基礎力，自己効力感

1．はじめに

1．1　石川県立看護大学における被災地ボランティア活動の経過

2011年（平成23年）3月11日に発生した東日本大震災は,広範囲に未曾有の被害をもたらし,3年半が経過した現在も多くの被災者が困難な生活を送っている.

被災地から遠く離れている石川県立看護大学（以下，本学と表す）では震災による直接的な影響はほとんどないものの，連日の報道によって現状を把握したり，教員が支援チームの一員として被災地に赴いたりという中で，被災地の復旧，復興の継続的な支援を少しでも担う手立てを探りながら過ごしていた．2011年7月に第1回学生セミナー「東日本大震災から考える－私たちが見たこと，考えたこと，そしてできること－」（主催:本学学生委員会，共催：本学同窓会）というテーマのもと，シンポジウムを開催した．シンポジストとして，被災地に派遣された教員と本学同窓会の協力を得て卒業生らが参加し，自身の体験を報告，意見交換を行なった．このころから，学生から「自分もボランティア活動をしたいが，時間がなかなか作れないし，どうやったらいいのか分からない」という気持ちが聞かれ，本学学長を中心に大学としても「何とか学生が被災地でボランティア活動ができるように大学として後押しできないか」という思いで，他大学の学生の動きに注意を向けていた．2012年1月に第2回学生セミナー「学生による災害ボランティアを考える」を開催し，被災地でボランティア活動を経験した本学学生をはじめ，県内他大学の学生を招いて体験談を聞き，学生が自分たちに何ができるかを考える機会を持ち，ボランティア活動の実現に向けて準備を開始した．その結果，ボランティアを求めていた宮城県亘理郡亘理町とめぐり合い，早速第一陣の学生ボランティアを募って，現地での活動を行なうこととなった．2012年から現在までの被災地ボランティア活動の状況を示す（表1).2014年9月末時点で計8回，のべ80人の学生が

[1] 石川県立看護大学　[§] 責任著者

表１　亘理町における被災地ボランティア活動の経過

活動日程	参加学生数	主な活動内容
2012. 3.6～3.9	15人（1年5人，3年10人）	仮設住宅集会所での茶話会，健康相談 亘理ささえあいセンター「ほっと」でのボランティア活動
2012. 3.27～3.30	14人（2年2人，3年12人）	
2012.10	約10人	大学祭での亘理町物産販売
2012.12.13～12.15	11人（2年1人，4年10人） 質問紙調査 インタビュー調査Aグループ実施	1人暮らし高齢者の集いのお手伝い，健康講話 仮設住宅集会所での茶話会，健康相談
2013. 3.6～3.8	15人（1年6人，2年8人，3年1人） 質問紙調査 インタビュー調査Bグループ実施	1人暮らし高齢者の集いのお手伝い，アトラクション実施 仮設住宅集会所での茶話会，健康相談 NPO法人亘理いちごっこによる訪問，お話会活動に参加
2013. 9.16～9.18	12人	台風のため中止
2013.10	約10人	大学祭での亘理町物産販売
2013.12.21～12.23	2人（2年2人）	NPO法人亘理いちごっこ主催のホームカミングディに参加 仮設住宅訪問
2014. 2.28～3.2	11人（1年1人，2年7人，3年3人）	NPO法人亘理いちごっこ主催のホームカミングディに参加（仙台市内） 仮設住宅集会所での茶話会，健康相談 仮設住宅訪問
2014. 9.24～9.25	4人（1年2人，3年2人）	災害時ボランティア等活動関係機関の視察（仙台市内） 仮設住宅訪問
2014. 9.29～9.30	8人（1年2人，3年6人）	仮設住宅訪問，集会所での茶話会

現地に赴き，さまざまな活動を展開している．

１．２　活動地域の概況

被災地ボランティア活動の受け入れは，宮城県亘理郡亘理町の社会福祉協議会亘理ささえあいセンター「ほっと」に依頼した．亘理町は宮城県の南東部に位置し，西は阿武隈高地，北は阿武隈川が流れ，東は太平洋に面する総面積 73.21 平方キロメートルの町であり，温暖な気候を活かして，いちごやりんごの果樹栽培が盛んである．震災時の人口は 11,442 世帯，35,576 人，被害状況は住民登録者の死者は 303 人，行方不明者２人，負傷者 45 人，住宅全壊 2,525 棟（地震被害によるもの 98 棟，津波被害によるもの 2,427 棟），半壊 902 棟（地震 275 棟、津波 627 棟），大規模半壊 222 棟，一部損壊 2,363 棟であった．仮設住宅は町内５箇所に計 1,126 戸建設され，平成 23 年７月時点では 1,018 世帯，3,143 人が入居していた[1-2]．

１．３　研究の目的

2012 年３月の最初に実施したボランティア活動後に今後のボランティア活動の動向の参考にするために，学生に活動を振り返っての感想や評価等を聞いたところ，満足度は高く，多くの学生が今後もボランティア活動に参加したいという声が多くあった．また，学生らは実際に現地に行くことで被災地の状況を肌で感じることができたこと，一人ひとりに合った支援の大切さ，伝えていく大切さ，継続した活動の必要性とその困難さ，精神的支援の必要性等の感想を多く述べており，達成感や充実感を得ていることが示唆された．

先行研究[3-8]ではボランティア体験が参加した学生に肯定的な影響を与えていることが指摘されており，さらに肯定的影響があるとされる能力，個人の内面の変化はボランティア活動の継続いかんによって違いがあるのかを明らかにする必要があると考えた．

そこで，本研究は被災地ボランティア活動が学生の自己イメージと社会人基礎力・自己効力感に与える影響を定量的に明らかにするとともに、質的に学生の思いを明らかにすることを目的とする．

２．方法

２．１　対象と調査内容

１）質問紙調査

研究の主旨を説明した上でボランティア活動への参加および調査協力の同意を得た学生 26 人に対し，2012 年 12 月および 2013 年 3 月のボランティア活動の前後に下記の 3 つの質問紙調査を実施した．（表 1）

①イメージ評定：SD 法（semantic differential scale method）による研究分野とその形容詞対尺度構成[9]より自己「わたし」，他者「人間」のイメージを尋ねるのに妥当である 26 項目「満足な－不満足な」「安定した－不安定な」「幸福な－不幸な」「成功する－失敗する」「自然な－不自然な」「自信のある－自信のない」「価値のある－価値のない」「よい－わるい」「親切な－不親切な」「親しみのある－よそよそしい」「感じのよい－感じの悪い」「好かれる－きらわれる」「重い－軽い」「大きい－小さい」「肥った－やせた」「固い－柔らかい」「強い－よわい」「粗野な－繊細な」「先に立つ－後に従う」「するどい－にぶい」「頭のよい－頭の悪い」「すぐれた－劣った」「緊張した－くつろいだ」「生き生きした－疲れた」「健康な－不健康な」「しっかりした－あやふやな」の形容詞対から構成されている．各形容詞対に「わたし」および「人間」のイメージをそれぞれ 7 段階評定で回答を求め，「どちらでもない」を 4 点とし，左端の形容詞に近いイメージから「とても」「かなり」「やや」とし 1 点，2 点，3 点と得点化した．また右端の形容詞に近いイメージから「とても」「かなり」「やや」として 7 点，6 点，5 点と得点化した．

②社会人基礎力：社会人基礎力測定尺度改訂版[10]は，文部科学省の提言する「職業的発達に関わる諸能力」と経済産業省が提案する「社会人基礎力」の概念的定義を整理し精査した結果，4 領域 15 能力にまとめたものである．4 領域とは「前に踏み出す力（8 項目）」「考え抜く力（11 項目）」「伝える力（9 項目）」「チームで働く力（12 項目）」の合計 40 項目から構成されている．各項目に対して「とてもある」を 4 点，「まったくない」を 1 点として数値化した．

③自己効力感：一般性セルフ・エフィカシー尺度[11]（generality self-efficacy scale：以下 GSES と略記する）を使用し，これは長期的に個人に影響を及ぼす自己効力感の 16 項目から構成され，行動の積極性，失敗に対する不安，能力の社会的位置づけの 3 つの側面を測定している．各項目に対して YES か NO かのどちらかの回答を求め，自己効力感が高いと認知される方への回答を 1 点として得点化した．大学生 278 名を対象とした先行研究[11]では GSES 得点は平均 6.58，標準偏差 3.37 と結果を示し，高値になるほど自己効力感が高いことを示している．

２）インタビュー調査

研究の主旨を説明した上でボランティア活動への参加および調査協力の同意を得た学生 21 人を対象とし，2012 年 12 月の活動に参加した学生 10 人（以下，A グループ），2013 年 3 月の活動に参加した学生 11 人（以下，B グループ）の 2 グループに対して，それぞれの活動後にインタビューガイドを用いて約 60 分程度のグループインタビュー調査を実施した．（表 1）A グループの対象者は 10 人，全員女子学生で，4 年生 9 人，1 年生 1 人であり，9 人がボランティア活動に 2 回参加し，1 人は 1 回の参加である．B グループの対象者は 11 人，女子学生 10 人，男子学生 1 人，そのうち 1 年生 6 人，2 年生 5 人である．ボランティア活動参加回数 1 回が 10 人，2 回参加が 1 人である．

インタビューの内容は，ボランティア活動への参加動機，活動に対する心配や不安，活動から得たもの・印象に残っていること，今後の思い，ボランティア活動をして自分自身に対する捉え方が変化したこと，手ごたえを感じたこと・辛かったこと，自分に不足しているところを感じたこと等である．

３）分析方法

質問紙調査について，対象者 26 人のうち，回答漏れがあった 1 人を除外し，ボランティア活動前後の差を比較するために，各調査票を対象者毎に対応させ，さらに 2012 年 3 月のボランティア活動にも参加したことがあるもの 13 人を「参加継続群」，2012 年 12 月または 2013 年 3 月のボランティア活動に初めて参加したもの 12 人を「初回参加群」の 2 群に分けて比較した．各群の対象者の学年別人数は，「参加継続群」4 年生 9 人，3 年生 1 人，2 年生 3 人の計 13 人，「初回参加群」2 年生 5 人，1 年生 7 人の計 12 人である．両群

の人数が少ないため，ウィルコクソンの符号付順位検定で分析した（SPSS Statics version21）.

インタビュー調査について，インタビュー内容は，対象者の了解を得てICレコーダで録音し，逐語録を作成した．グループ毎に学生の思いや感じたことが語られた文章を取り出し，類似する内容をまとめて集約した.

4）倫理的配慮

本調査は石川県立看護大学倫理委員会の承認を得て実施した（第1045号）．対象者には研究目的，調査への協力依頼，自由意志による参加，参加有無により不利益を被らないこと，成績評価には一切関係しないこと等の説明を口頭ならびに文書で行い，同意書に署名を得た．前後比較のため，人物が同定されるが，プライバシーの保護に十分注意し，公表の際には個人が特定されることがないことを説明した.

3．結果

3．1　質問紙調査

「わたし」，「人間」のイメージおよび「わたし」と「人間」のイメージ差に，ボランティア活動前後で参加継続群と初回参加群それぞれで有意に肯定的な変化が認められた形容詞対を表2に示した．活動前後で自己イメージの「わたし」のイメージで有意な変化が認められた項目は，参加継続群では「幸福な」「自然な」（$p<0.01$），「満足な」「自信のある」「価値のある」「よい」「親切な」「親しみのある」（$p<0.05$）であった．初回参加群では「満足な」「価値のある」「よい」（$p<0.05$）であった.「人間」のイメージで有意な変化が認められた項目は，参加継続群では「満足な」（$p<0.01$），「健康な」（$p<0.05$），初回参加群では，「自信のある」（$p<0.01$），「安定した」「自然な」「親しみのある」「感じのよい」「好かれる」「大きい」「健康な」「しっかりした」（$p<0.05$）であった．「わたし」と「人間」のイメージ差では，参加継続群では「自然な」（$p<0.05$），初回参加群では「大きい」（$p<0.05$）において変化が認められた.

ボランティア活動前後で参加継続群と初回参加群それぞれの社会人基礎力の変化を領域ごとに表3に示した．社会人基礎力において活動後に有意に差が認められた領域は，参加継続群では「伝える力」（$p<0.05$），初回参加群では「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」（$p<0.05$），「伝える力」（$p<0.01$）であり，いずれも高くなっていた.

ボランティア活動前後で参加継続群と初回参加群それぞれのGSES得点の変化を表4に示した．GSES得点は参加継続群では活動前より活動後は有意に高くなっていたが，初回参加群では差がなかった.

3．2　インタビュー調査

学生の思いはAグループでは，「被災地への関心度の向上と維持」，「看護学を活かした活動への自信」，「継続したボランティア活動の利点」，「自分たちの立場や姿勢」，「活動に対する葛藤」，「学生同士の気持ちの温度差」，「負の衝撃への対処」に集約した.

Bグループでは，「被災地への関心度の向上と維持」，「看護学を活かした活動の利点」，「継続したボランティア活動の必要性」，「被災住民のために活動したい気持ち」，「個々の被災状況に合わせた支援の必要性」，「自分たちの活動の意義付け」，「不用意に相手を傷つけてしまうかもしれないことへの不安」，「活動内容を十分に伝えられないもどかしさ」に集約した．（表5）

4．考察

4．1　学生の自己イメージ，社会人基礎力，自己効力感への影響

「わたし」のイメージは，参加継続群の方が初回参加群よりも大きく変化があり，「人間」のイメージは初回参加群の方が参加継続群よりも大きく変化があることが明らかとなった．また，「わたし」と「人間」のイメージ差には変化がほとんどなかった．このことより，初回参加群の学生の目が参加継続群の学生に比べて，より他人に向いていることを示していると思われ，参加継続群の学生は自分の行動を冷静に振り返ることができ，それが「わたし」イメージの肯定的変化につながっているものと考えられる．すなわち，被災地学生ボランティア活動はそれに継続して参加することで，被災地住民に受け入れられるのかどうかだけでなく，自分自身を振り返り自己受容へと展開できるのではないかと考える.

香春ら[12]は，看護学生がボランティア活動することにより，人々や地域への理解を深め，自らの職業意欲を高めること，活動に対する責任，ボランティア活動のあり方について学んでいると報告している一方，伊丹ら[13]によると看護学生は一般学生と比較して，他者意識（他者へ注意や関

表２　ボランティア活動前後によるイメージの変化の比較

「わたし」

	参加継続群(n＝13)						初回参加群(n=12)				
	前		後				前		後		
項目	平均	標準偏差	平均	標準偏差	有意水準	項目	平均	標準偏差	平均	標準偏差	有意水準
満足な	3.62	0.96	2.85	0.69	*	満足な	3.50	1.00	2.67	0.78	*
幸福な	2.92	0.95	2.08	0.76	**	幸福な	2.83	0.94	2.58	1.00	ns
自然な	3.54	0.97	2.7	1.25	**	自然な	3.17	0.72	3.08	0.67	ns
自信のある	3.92	1.04	3.23	1.01	*	自信のある	4.00	1.04	3.42	0.79	ns
価値のある	3.77	0.73	3.08	0.86	*	価値のある	3.50	0.52	2.92	0.90	*
よい	3.62	0.87	3.00	0.91	*	よい	3.83	0.72	3.25	0.75	*
親切な	3.23	1.09	2.62	0.87	*	親切な	3.67	0.78	3.25	0.62	ns
親しみのある	3.54	1.13	2.69	0.95	*	親しみのある	3.17	1.03	3.00	0.95	ns

「人間」

満足な	3.92	0.49	3.08	0.64	**	満足な	3.42	0.79	2.92	1.00	ns
安定した	4.08	0.95	3.85	0.90	ns	安定した	3.92	1.00	3.17	1.03	*
自然な	3.08	1.19	3.31	1.18	ns	自然な	3.83	1.12	3.08	0.67	*
自信のある	3.54	0.88	3.69	0.75	ns	自信のある	3.83	0.72	3.08	0.67	**
親しみのある	3.23	0.93	3.15	1.35	ns	親しみのある	3.33	0.89	2.75	0.75	*
感じのよい	3.77	0.73	3.62	1.04	ns	感じのよい	3.58	0.52	3.08	0.67	*
好かれる	3.54	0.66	3.54	1.05	ns	好かれる	3.75	0.22	3.25	0.62	*
大きい	3.69	0.95	3.23	1.17	ns	大きい	3.92	0.52	3.17	0.94	*
健康な	4.00	1.41	3.39	1.33	*	健康な	3.42	0.79	2.75	0.87	*
しっかりした	4.08	1.19	3.62	1.26	ns	しっかりした	3.83	0.84	3.17	1.03	*

「わたし」と「人間」の差

自然な	−0.46	1.39	0.62	1.61	*	自然な	0.67	1.07	0.00	0.74	ns
大きい	0.23	1.48	−0.23	2.28	ns	大きい	0.00	1.04	−0.75	1.14	*

*:p<0.05 **:p<0.01　ns：not signficant

表３　ボランティア活動前後による社会人基礎力の変化

	参加継続群(n＝13)					初回参加群(n=12)				
	前		後			前		後		
領域	平均	標準偏差	平均	標準偏差	有意水準	平均	標準偏差	平均	標準偏差	有意水準
前に踏み出す力	23.08	2.84	23.46	2.90	ns	20.25	2.18	22.33	2.42	*
考え抜く力	27.62	3.28	30.38	5.33	ns	24.67	4.56	28.58	4.25	*
伝える力	22.08	3.23	24.31	4.01	*	20.75	3.82	23.67	3.20	**
チームで働く力	36.00	3.89	37.00	3.72	ns	32.92	2.57	35.50	3.34	*

*:p<0.05　**:p<0.01　ns：not signficant

表４　ボランティア活動前後による自己効力感の変化

	参加継続群(n＝13)					初回参加群(n=12)				
	前		後			前		後		
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	有意水準	平均	標準偏差	平均	標準偏差	有意水準
GSES得点	7.69	3.50	9.31	3.43	*	8.25	4.05	8.75	4.05	ns

*:p<0.05　**:p<0.01　ns：not signficant

表５　ボランティア活動後の学生の思い

【Aグループ】

学生の思い	発言例
被災地への関心度の向上と維持	「行ってみて興味が出て，関心を持つようになった」 「行ったあとのほうが東北のニュースを気にするようになった」 「次に機会があれば参加したいなっていう意識が高まった」 「私たちも個人的に継続できたらいいなと感じた」 「身近な感じ．地元までいうと大げさだけど」
看護学を活かした活動への自信	「4年生だからここまでできたのかなというのは感じた」 「4年生は専門を生かしてこんなにできるんだ」 「自分達の強みだなって実感できた」 「医療視点で関われることって大事だなとあらためて気が付いた」 「行ったこと自体が自分のプラスになったというか，レベルアップみたいなそんな感じ」
継続したボランティア活動の利点	「その時期になにができるかなって考えて私たちなりにできたかな，2回目は」 「2回目はボランティアという意識はあまりなくて，こっちが元気をもらうパターン」 「2回目は覚えていてくれた方も信頼してくれている感じがしていた」 「2回目のほうが入っていけたかな，周りにも気を配れたかな」 「2回目は臨機応変にできたよね」 「今でもできることがあるんだ」 「自分が4年間で学生としてできたことがボランティアって自信持って言えるかな」
自分たちの立場や姿勢	「ボランティアたくさんやってきて自信が足を引っ張るときもあって．上から目線になっていないかなとか」 「マイナスのイメージを持ちながら関わってしまいそう」 「被災者として意識されるのもいやだと思うし」 「何かしたいと思う気持ちも大切だけど，その思いにとらわれすぎちゃだめかな」 「引き出すものじゃないし，自然に出てきたら傾聴するもの」 「使命感っていうとなんか違って，私たちのやっていることも数あるボランティアの一つでしかないし，その中で私たちができることをできればいいなみたいな」
活動に対する葛藤	「これって自己満足じゃないかなって悩んで，ボランティアって言葉自体に引け目を感じた」 「ほんとに自分の気持ちで社会貢献できるのがボランティアかな．自己満足でもいいんじゃないか，自分がやりがいを感じることで意味はあるのかな」
学生同士の気持ちの温度差	「行きたいよね？とすごく勝手に燃えて．使命感じゃないですが，興味があったのもあって」 「何で行きたいと思わないの」 「どこか一歩引いた，みんなよりは熱意はないかなというのは行く前に思っていて」 「初めて行く前にはすごく迷った．みんなについていく感じで来たみたいな．自分だけこんなんでいいのかなと思った」 「私たちばかり張り切って温度差感じてたから」
負の衝撃への対処	「話を聞いてショックを受けて泣いたりしたけど，みんなで共有してみんなで泣いて消化できた」 「常に泣いていた，インパクト大きかったなぁ」 「看護系だから割とメンタルは鍛えられている」 「ショックは受けるけど冷静な自分もいて，今はこの人のために話を聞いて受け止める，みたいな」 「前向きに聞く」

【Bグループ】

学生の思い	発言例
被災地への関心度の向上と維持	「現状を知りたい」 「被災地で住民と知り合ったり，支援活動をしている大人と知り合ったりすることで被災地への関心が変わった」 「行ってみると関心が増した，もっと知っていかなきゃ」 「現状を目で見て感じてほかの人たちにもっと伝えて，みんながもっと継続して考えていく問題だと感じた」
看護学を活かした活動の利点	「血圧測定をさせてもらってお話が弾んだ」 「看護学生だと聞いて健康問題を話してくれる方がいた．お医者さんには話せなくて，学生には気軽に話してくれた」
継続したボランティア活動の必要性	「何回も繰り返して行くことで顔なじみになるつながりは強いし，そういうのを作りたい」 「また来てくれたねと言われてとてもうれしかった」 「以前に会ったことを覚えていてくれて，温かい言葉をかけてもらって，同じところに継続していく必要があると感じた」 「場所が違っていても，また来たよと言いたかった」 「また待ってるから来てねと言われた」
被災住民のために活動したい気持ち	「自分に出来ることないかな」 「役に立てたらな」 「何かしたいという思いがあった」 「住民の方と接する機会になる，お話できる」
個々の被災状況に合わせた支援の必要性	「一人ひとり受けた傷は違う」 「被災者が一括りになってしまっていて．一人ひとりに合わせた支援が大事だな」 「細かい支援はまだまだ足りていないところがある」
自分たちの活動の意義付け	「被災地以外の人の関心は薄れてきているから，私たちが被災者に代わり伝えていかなくては」 「ありがとうと言ってもらってこんな私でも何かできるんやなと気付けた」 「住民の方が一瞬だけでも楽しく過ごしてもらえたら，そのお手伝いができて良かったな」 「特になにができるってわけじゃないけど，話を聞かせてもらうだけで少しでもプラスになるのかな」 「住民が集まるきっかけを作れて，元気づけるひとつのきっかけとして自分たちも出来ることがあった」 「行くだけでちょっと触れるだけでもその人に与える力って大きいと実感」
不用意に相手を傷つけてしまうかもしれないことへの不安	「聞いちゃいけないことを聞いて傷つけてしまったらどうしよう」 「（住民が）心の整理がついているのかどうかわからなくて，泣き出されたらどうしよう」 「私たちにとっては日常会話でも傷になってしまうかもと心配」 「自分がかけれる言葉はあるのか，言っちゃいけない言葉を言ってしまうのではないか」 「自分は被災していないから，へんに言葉をかけれない」
活動内容を十分に伝えられないもどかしさ	「親から聞かれたとき，何をどういうふうに説明したらあの状況をそのまま伝えられるんだろうと思った」 「どうやってみんなに伝えていけばいいのかわからないけど」

心，意識が向けられた状態）が高く，さらに他者意識が高い者はサークル活動やボランティア活動を多く経験していることとの関連を述べている．学生らはボランティア活動等に参加し，自分の目で現地を見て住民と触れ合い，繋がりを実感し，人と関わる経験を持つことによって他者，対象を理解しようと関心を持ち，継続することで対人関係に自信を持ったり，自己の体験を意味づけたりしながら職業意識を高めているのではないかと考える．

社会人基礎力において，参加継続群では活動後に伸びを認めたものが「伝える力」のみであることから，参加継続群の学生はこれまでの活動経験から社会人基礎力として捉えられている能力がある程度育ち，ボランティア活動前の得点が高く，天井効果のために有意差を認めなかった可能性が考えられる．一方，初回参加群では社会人基礎力のいずれの領域も伸びていることから，現地で被災者の方々に直接話を伺い，学生一人ひとりがさまざまなことを考え，ボランティアとしての活動をやり遂げた経験が効果として表れていると推測される．看護師や保健師を目指している学生は社会人基礎力の基礎と呼べる力を持っている，看護師養成学校では演習や実習の場が社会人基礎力を伸ばすいい機会になること，社会人基礎力は学生が意識することで学校生活以外の場でも伸ばすことが可能となることから[14]，今後社会人基礎力育成を意識し視野に入れた教育やボランティア活動の企画を検討するとよいのではないかと考える．

GSES 得点が初回参加群で向上を認めなかったことは，個別差が大きく，学生の自己評価に対する不安定さが反映している可能性が考えられる．豊嶋ら[15]，山崎ら[16]は看護学生の自己効力感を高める要因として，対象との良い関係が持てること，勉強意欲が高まること，実際的知識や社会的態度の習得，他者からほめられる，良い評価をされることや励まし，参考になるモデルの存在等を報告しており，このボランティア活動を継続して展開する際には，教員は自らも実践者となり，学生らが活動しやすい場づくりや良好な対人関係づくり，成功体験を実感すること，学生らの思いを聴くこと，学生同士の交流を図る等のサポートが必要だと考える．

４．２　被災地ボランティア活動に対する学生の思い

グループインタビューにより集約された学生の思いや感じたことを概観すると，活動に対する前向きな気持ちとして，A･B 両グループともに「被災地への関心度の向上と維持」，「看護学を活かした活動への自信」，「継続したボランティア活動の利点・継続したボランティア活動の必要性」について，心配や不安を表出したものとして，A グループでは「活動に対する葛藤」，「学生同士の気持ちの温度差」，「負の衝撃への対処」，B グループでは「不用意に相手を傷つけてしまうかもしれないことへの不安」，「活動内容を十分に伝えられないもどかしさ」について語られていたと考える．

A グループでは対象者のほとんどが 4 年次生であり，看護学教育課程をほぼ全て修了していることから看護専門職として活動することの自負的な発言がみられ，さらにほとんどがボランティア活動を 2 回経験していたために初回のボランティア活動からの思いの経過についての発言が得られたと思われる．これは前述した参加継続群の学生は自分の行動を冷静に振り返ることができていることにも現れている．被災地やそこで生活している住民に対してメディアからの客観的な情報だけではなく，実際に被災地に立ち住民と触れ合うことで認識した現実やそれに対する思いを学生らは真摯に受け止めていた．初回の活動前後において，初めて目の当たりにした被災地のさまざまな状況を学生同士で共有し合うことを自分なりに現実を受け入れて理解していく一助としながらも，自問自答を繰り返しながら活動を展開している様子が推測できた．それらを踏まえて次の活動では，学生ボランティアとしての立場を自覚し，住民に寄り添い，自分の専門性を活かせることを武器にして，自信を持って活動に取り組んでいたのではないかと思われる．

B グループでは，「自分の言動が被災地の人たちを傷つけてしまうのではないかと心配になった」と活動以前の思いを振り返る発言があり，「不用意に相手を傷つけてしまうかも知れないことへの不安」を抱えていたことは対象者が下級学年，ボランティア活動初参加の学生がほとんどを占めていたためと考える．前述した「人間」イメージの結果から初回参加群の学生の目が参加継続群の学生に比べて，より他人に向いていることを示していると考えたことと一致している．中島らの調査[17]でも低学年の学生は活動前にはボランティアについて漠然としたイメージしかなく不安を生じており，それは知識や技術が伴わないために生じた不安ではないかと考察する．しかし，現地で

住民の温かさに触れ,逆に励まされ元気をもらい,学生らは初めて見た被災地と住民のさまざまな状況を自分自身で受容し，理解し，そして看護学を活かすことができる自分たちの活動の利点やその意義を見出すことによりボランティアとしての活動をやり遂げたという経験となり，すぐに次の継続した活動の必要性やその意欲と創造へとつなげている様子が推測された．小林の報告[18]では，ボランティア活動に継続的に複数回参加している学生の理由の全体的な傾向として，現地の人と繋がりができ，人と文化に触れれることで親近感がわき，単なる「ボランティアをしたい」から「この人たちの助けになりたい」と変化した様子を示し，これは利己的な動機から「利他性」を備えた動機へと変化したと考えており，今回の調査でも同様の傾向が認められたといえる．さらに小林[18]はボランティアの継続性には,現地の人との繋がり,交流が重要な意味を持っているとも述べており,本学の被災地におけるボランティア活動は住民との関わりを強化し，学生の活動の充実感や学びの原点となる有効性が示されたことから，これからも継続できる状況にあることとその必要性があると考える．

４．３　被災地ボランティア活動が学生に与えた影響と今後の活動方法

これらのことから，学生は被災地ボランティア活動に参加し，さらに継続することにより，自己イメージの肯定的影響はより大きくなり，社会人基礎力と自己効力感を向上させる効果があることが考えられた．そのためには被災地ボランティア活動は単発のイベントではなく，継続して企画することが必要だと考えられ，これは被災地での活動に関わらず，学外で地域住民をはじめ，学生らがさまざまな人々と関わることができる諸活動も同様である．

また，それに関わる教員の役割を考えると，身近な相談役になりながら学生の思いを聴き，自らも実践者としてともに喜びや困難を共有すること(特に被災地での活動は，生々しい衝撃的な現場や住民の話を目の当たりにする学生らに対して十分な配慮が必要だと考える)，学生らの活動を認めること，看護学を活かせる自信となるよう活動を意味づけていくこと等，学生が主体となって活動を継続できるようにサポートすることで学生により肯定的な変化が生じることを期待する．大学としては，被災地での活動に関わらず，まず学生らが学外で活動する機会を持つことを提案し，人を理解する，地域を知ることに興味と関心を持つようにしていくこと，さらに継続した活動にするためには場所や機会，資金等のバックアップも望まれる．

研究者らは今日までの本学のボランティア活動の企画，準備から実践を学生と一緒に行なってきたことにより，学生らの被災地住民に対する熱い純粋な思いと真摯な態度，想像を絶する悲惨な状況を見聞きすることによる不安や困惑している様子，ボランティア活動に対する葛藤などさまざまな思いを直接間近で見て，共感している．さらに災害直後から今までの被災地の住民をはじめ，現地の行政や支援関係機関の状況も見ている．このような中で実践と一体化してボランティア活動が学生に与える影響に関する研究を行なうことは,学生らの汗と涙の活動の成果と実際の学びを表現，共有し，さらに活動を後押し・支援することになると思われる．それを現地の住民や支援関係者とも共有することで新たな喜びとなり，彼らの心の復興の一助となり，地域の人々の健康に寄与すると思われ，本学のよりよい教育に寄与すると考える．

５．まとめ

被災地ボランティア活動が，学生に与える影響と学生の思いについて明らかにした．学生の自己イメージでは，ボランティア活動前後を比較して「わたし」イメージの変化は参加継続群の方が初回参加群よりも肯定的な変化があり,また「人間」イメージは初回参加群の方が参加継続群よりも変化があることが明らかとなった．社会人基礎力では，参加継続群では活動後に伸びを認めたものが「伝える力」のみであったが，初回参加群では社会人基礎力のいずれも伸びていた．GSES 得点は参加継続群では活動前より活動後は有意に高くなっていたが，初回参加群では変化がなかった．学生の思いでは活動に対する前向きな気持ちとして「被災地への関心度の向上と維持」,「看護学を活かした活動への自信」,「継続したボランティア活動の利点・継続したボランティア活動の必要性」，心配や不安を表出したものとして，「活動に対する葛藤」,「学生同士の気持ちの温度差」,「負の衝撃への対処」,「不用意に相手を傷つけてしまうかもしれないことへの不安」,「活動内容を十分に伝えられないもどかしさ」について集約され,学生の活動参加回数や学年によって，自己の振り

返りによる自己受容や自信，対象への理解や関心の深まり，自分が関わることによる他者に対する不安や心配が生じる違いがあった．

学生がボランティア活動を継続して行なうことより，看護学を活かせる自分たちの利点や意義を見出し，やり遂げたという経験を積み重ね，他者に自分が受け入れられるかだけでなく，自分自身を振り返り自己受容へと展開し，自己イメージの肯定的影響はより大きくなり，社会人基礎力と自己効力感を向上させる効果があることが考えられた．

また，それに関わる教員らの役割としては，学生の思いを聴くこと，学生の自主的な活動や人や地域との繋がりを支え，達成感や人の役に立てたという感覚を持てるように関わり支援していくこと等，学生が主体となって活動を継続できるようにサポートすることが望まれる．

６．今後の被災地ボランティア活動の展望と課題

本学学生が宮城県亘理郡亘理町で行なっている被災地ボランティア活動は，現在これまでの活動実績から比較的スムーズに現地関係機関と連携して，学生が主体的に活動の計画立案から準備，実施が行なえているため，活動自体に大きな問題はなく，住民からは毎回活動に対する歓迎，感謝，期待の声をいただいている．しかし，住民一人ひとりに生活者としてお話を伺うと，日々家族関係や生活環境，心と身体が変化している様子が語られ，個別対応の必要性を感じることが多々見受けられる．さらに，活動拠点としている仮設住宅の様子も月日の経過に伴い変化しており，縮小，統合の可能性や災害復興住宅の建設の予定も聞かれていることから，今後の学生ボランティア活動にもハード，ソフトの両面から何らかの変化が求められると考えられ，学生からもその必要性を感じる評価が上がってきている．そこで，今後の活動計画として，学生自ら現地住民らのニーズ調査を行ない，それに応えるボランティア活動を企画，展開していくことを検討している．この活動により，学生らの意欲向上や活動自体を効果的に継続させることに繋がることを期待する．

また，課題としては，過密な大学カリキュラムの合間を縫っての遠方からのボランティア活動であること，震災後の時間の経過からその活動のあり方の模索，活動資金の確保，学生のボランティア活動への関心の低下が挙げられる．そこで2013年5月には学生サークル「災害ボランティアサークル・ふたば」を設立し，サークル活動として継続していくことを目指している．「災害ボランティアサークル・ふたば」は，これまでの活動実績と今後の活動計画が認められ，公益財団法人大和証券福祉財団による「平成25年度第3回災害時ボランティア活動助成」を受贈し，活動資金を獲得している．これを活用して新たに被災地仮設住宅住民の孤立防止のための心の交流プロジェクト[19]を始動し，ふたば通信の発行や文通，サークルのホームページ，Facebookの開設を通して,亘理町の住民との交流を続けている．また，亘理町での活動だけではなく，地元の防災訓練等に参加し，災害に強いまちづくりへの協力を行なっている．これらの活動が評価され，平成26年度石川県立看護大学学長表彰を受けたことを併せて報告する．

謝辞

本学のボランティア活動の受入れおよびコーディネートをしていただいている宮城県亘理郡亘理町社会福祉協議会亘理ささえあいセンター「ほっと」および関係者各位，いつも温かく迎えてくださる住民の皆さまに深くお礼申し上げます．一日も早い復旧，復興を心よりお祈り申し上げます．

また，学生のボランティア活動を支援，応援してくださる石川県立看護大学学長をはじめ，教職員の皆さま，関係者各位に深くお礼を申し上げます．

なお，本研究は平成25年度学内研究助成を受けて実施しました．

利益相反

なし．

引用文献

1）亘理町災害対策本部広報資料：3.11東日本大震災 亘理町民の記憶に残ったもの．平成24年3月資料提供

2）亘理町：被害・復旧状況．http://www.town.watari.miyagi.jp/index.cfm/22,0,129,html. 2014.9.20

3）鈴木絵夢，高木紀江，伊丹君和：人と関わる体験およびボランティア活動が看護学生に与える影響．第39回日本看護学会論文集 看護教育，199-201, 2008.

4）河井亨：ボランティア活動への参加によって学生の学習がどう異なるのか－全国大学生調査の分析から

－．ボランティア学研究，12，91-102，2012.
5）飯考行，李永俊，作道信介，他：大学教育としての災害ボランティア－「東日本大震災復興論』の開講－．21世紀教育フォーラム，7，11-27，2012.
6）水落洋志，尾上明子，菊池伸二，他：ボランティア活動が保育者を目指す学生の自己教育力に及ぼす影響－東日本大震災復興支援ボランティア活動に参加して－．名古屋柳城短期大学研究紀要，34，189-197，2012.
7）石川美智子，板倉朋世，松本明美：看護大学に在籍する学生の課外活動と社会人基礎力との関連性．獨協医科大学看護学部紀要，7，11-21，2013.
8）鈴木康文，佐藤和典，永井智：大学教育の中における課外活動の教育的意義－つくば国際トレーナー活動研究会における取組み－．医療保健学研究，4，51-60，2013.
9）井上正明，小林利宣：日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観．教育心理学研究，33，253-260，1985.
10）西道実：社会人基礎力の測定に関する尺度構成の試み．プール学院大学研究紀要，51，217-228．2011.
11）坂野雄二，東條光彦：一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み．行動療法研究，12，1，73-82，1986.
12）香春知永，田代順子，及川郁子，他：ヘルスボランティア活動をしている看護学生の学習ニーズと学習支援のあり方．聖路加看護学会誌，9，1，11-18，2005.
13）伊丹君和，亀澤里恵子，川合小百合，他：看護学生における生活体験・対人関係の実態と他者意識との関連．日本看護学会論文集 看護教育，36，209-211，2005.
14）箕浦とき子，高橋恵編：看護職としての社会人基礎力の育て方　専門性の発揮を支える3つの能力・12の能力要素．42-43，日本看護協会出版会，2012.
15）豊嶋三枝子，堤かおり：看護学実習における学生の自己効力感に影響する要因－インタビュー内容の分析－．日本看護学教育学会誌，14，3，19-30，2005.
16）山崎章恵，百瀬由美子，阪口しげ子：看護学生の臨地実習前後における自己効力感の変化と影響要因．信州大学医療技術短期大学部紀要，26，25-34，2001.
17）中島佳緒里，大渡佳世，奥村潤子：仮設住宅におけるボランティア活動を通した看護学生の学び．日本赤十字豊田看護大学紀要，8，1，41-46，2013.
18）小林功英編：災害ボランティア経験が持つ大学生への教育効果：高等教育研究叢書，126，広島大学高等教育研究開発センター，2014.
19）石川県立看護大学　FD/自己点検・評価委員会年報・自己点検評価専門部会：平成25年度石川県立看護大学年報第14巻，99，2014.

Influence of participating in volunteer activities in disaster affected areas on nursing students' self-image, self-efficacy, their scores on the Fundamental Competencies for Working Persons, and their thoughts

Shiho SONE, Masashi TAKEYAMA, Masayo KANAYA, Kazuko ISHIGAKI

Abstract

This study aimed to clarify the influence of participating in volunteer activities in disaster affected areas on nursing students' self-image, self-efficacy, their scores on the Fundamental Competencies for Working Persons, and their thoughts in order to establish measures for supporting students' volunteer activities. Subjects were the total number of 47 nursing students who participated in volunteer activities in a disaster affected area (Watari, Miyagi). Students were asked to complete the Image of the Self and Others and Fundamental Competencies for Working Persons questionnaires. Questionnaire data were compared between students who volunteered only once and those who volunteered several times. Interviews about the students' thoughts after their volunteer activity were also conducted. Interview transcripts were coded and categorized based on content. The results indicated that after the volunteer activity, the self-image of students who volunteered several times, while the image of others changed in those who volunteered only once. All students who volunteered only once showed improved scores on the Fundamental Competencies for Working Persons. Furthermore, self-efficacy scores improved in all students who volunteered several times. These results suggest that students are aware of the advantage of studying nursing and feel a sense of accomplishment by continuing to volunteer. Students who volunteer look back on themselves with approval. Their affirmation influences their self-image and their self-efficacy. Therefore, we aim to support students' volunteer activities by providing guidance during their participation.

Keywords volunteer activities in disaster affected areas, nursing student, self-image, Fundamental Competencies for Working Persons, self-efficacy